

氏 名 ランシマーブンスン スグ
RANGSIMA BOONSINSUKH
学位(専攻分野) 博士 (人間・環境学)
学位記番号 人 博 第 69 号
学位授与の日付 平成 11 年 3 月 23 日
学位授与の要件 学位規則第 4 条第 1 項該当
研究科・専攻 人間・環境学研究科 文化・地域環境学専攻
学位論文題目 『小野小町集』全評釈と小町歌の研究

(主査)
論文調査委員 教授 藺田 稔 教授 内田 賢徳 助教授 島崎 健

論文内容の要旨

本論文は、私家集『小野小町集』の全評釈と、それに基づく小町歌の研究で、次の如く構成されている。

第一章 『小野小町集』本文と全評釈

第二章 小町歌の「あはれ」美

「あはれ」の意義そのものについて

「あはれ」の分類について

第三章 「あはれ」による小野小町の心境

第一章は、小野小町の私家集として伝わる『小野小町集』について、日本古典全書を底本にして、百十七首の歌の総てに互って、評釈が施されたものである。一首ごとに、勅撰集など他の集に採られている場合はそれを注記し、口語訳と注釈を含む評釈を施し、各種の異文を掲げる。この全評釈が、量的には本論文の約半分を占める。

第二章は、第一章の全体に互る読解作業に基づいて、小町作とみなされる歌のみ八五首を取り上げて、小町の歌を集中的かつ総体的により深く理解しようと試みたものである。「あはれ」のある歌が特徴的に多いことに小町歌の本質を見、考察の中心に「あはれ」を据えて、まず「あはれ」一般が考察され、その中に小町歌の「あはれ」が位置づけられる。小町歌の特徴としての「あはれ」の意味は次の四つに分類される

(1) 悲しい、さびしい、はかない

(2) 切なる思い

(3) しみじみとした情趣

(4) 気の毒、かわいそう

これらの意味の「あはれ」の表出に、物に寄せるか否か、又、表出する対者との関係が如何なるものか、という二つの軸を組み合わせて、例えば上記(1)の意味の「あはれ」の表出の場合、次の如き分類の中に位置づけられる。

I. 「あはれ」のある歌

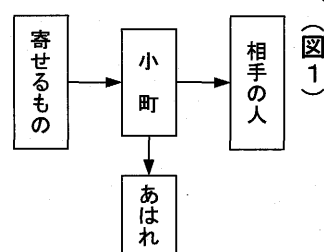
(a) 相手の人の存在がある歌

一、悲しいこと、さびしいこと、はかないこと

(その一) 何かに寄せて詠む歌

イ、小町が相手の人に意識的にそして、直接に自己の思いを強く訴えて詠む歌

ロ、小町が相手の人に意識的に言外に強く訴えて詠む歌



- ハ、「イ」とは同様であるが、寄せるものは相手の身の代わりである歌
ニ、小町が相手の人を意識的、或いは無意識に思いながら、自己の思いを詠む歌
(その二) 何にも寄せずに詠む歌
ホ、小町が相手の人に意識的に自己の思いを強く訴えて詠む歌
ヘ、小町が意識的、或いは無意識に相手の人を思いながら詠む歌
ト、小町が相手の人に意識的に言外に強く訴えて詠む歌

そして、イロハ記号の下に分類された関係が、総てに互って、例えばイの場合は右の如く図示される。前章で一通りの評釈を施された小町歌の総てがこの関係把握の中に位置づけられて、「あはれ」の表出の仕方を中心に改めて解説される。

第三章は、以上に基づきながら、小町歌を通して小町自身の心境を、更には小野小町その人の人生の層を見ようとした試みで、「あはれ」を軸に分類された歌々が、小町の人生の過程における次の三つの段階のものとして再構成される。

- (A) 男への情熱的な「あはれ」な心、切なく恋しい自分自身、主観的である自分自身
(B) 男への不信の嘆き、悲しくてさびしい自分自身、主観的から客観的に展開していく自分自身
(C) 「憂き世」を見つづける自分自身、はかない自分自身、客観的である自分自身

小町歌をかく人生の層に重ね合わそうと試みたのが、第三章である。

なお末尾には『小野小町集』全歌についての索引が備えられ、更に小町歌だけの、かつ「あはれ」によって分類した独自の索引も付されている。

論文審査の結果の要旨

第一章は、私家集『小野小町集』についての初全評釈であるという点にまずは大きな意義が認められる。底本の日本古典全書は全歌を掲げてはいるものの、部分的に頭注が施されている簡略なものであり、また参考文献に掲げられた幾つかの研究書や評伝のそれぞれにも小町歌が多く引用解説されてはいるが、なお部分的であった。そのために結果として、難解な歌や不可解な歌には言及されないままに終わっていた。本論文の約半分を占める本章は、初めて『小野小町集』の総ての歌に評釈を施した、文字通りの労作である。付記されている「本文と校異」は先行研究書に拠るものだが、申請者の新発見も若干加えられ、またそれらに基づいて底本の本文に妥当な修正が施されてもいる。評釈の内容も概ね妥当であり、研究の基礎をなす適切な先駆的労作としての貴重な意義が認められよう。

第二章は、従来しばしば部分的に伝記資料として、また時には古今集に採られた歌のみに拠って論じられるくらいであった小町の歌を、第一章の家集全評釈を踏まえて、その中の小町作と認められる総ての歌について、集中的かつ総体的に考察した点に、まずは意義が認められる。

古今和歌集仮名序に言うところの、歌が「見るもの聞くものにつけて言ひいだせるもの」とは、歌が「物に寄せ」て成立することと同義であるが、申請者はかつて修士論文に於て、その「物に寄せる」方法を仮名序に言う「歌のさま六つなり」という歌の分類に適用して、古今集恋歌の総てを分類したことがある。この仮名序の和歌分類は、従来は漢詩分類の翻案として和歌には適わないものとされてきたものだが、「歌のさま」を「物に寄せる寄せ方のさま」と解することにより、紀貫之が和歌の分類として掲げたものが当然のことながら有意であることを確認したものである。その古今集歌の分類分析の基礎に立った上での小町歌分析が本章で、小町歌の特徴として「あはれ」に注目する。およそ歌は「あはれ」の表出ともいえるが、申請者は特に小野小町にその本質を見出し、その「あはれ」の意味を分析して、小町的「あはれ」を分類の中軸に据え、それに「対者との関係」「物に寄せるさま」という二つの軸を絡めて分類分析を行う。これは上記の古今集の伝統に基づいた妥当な和歌理解の一方法といえよう

三つの軸を組み合わせた分類のあり方は詳細であり、こうした分類を施し得ること自体が申請者の小町歌についての深い理解力を示すものである。加えて同時にその理解が一々図解されるというのもこの種の論文としてはユニークで、論者の独自性を示してもいる。

分類項目の説明に同様の表現が繰り返され過ぎるきらいもあるが、詳細な分類に於てはそれぞれの位置を明確にするため

に、或いは必要でもあろうか。また、図相互の微妙な差異にやや理解し難い点もあるが、これも小町歌の一首々々の微妙な差を申請者が読み取っていることの表れともみなされる。もとより本来的に歌の理解には異論が出るものであるが、このような分類分析によって、前章で示された解釈を超えた申請者のより深い理解が示されていることは認められる。結果、従来漠然と「小町的」と言われてきたイメージに対して小町歌の特質を、より実証的にも端的に取り出してみせたという点に意義があろう。

以上は小町作と認められると申請者が判断した歌についてではあるが、小町その人は極めて伝承伝説の多い人物で、家集として伝わる『小野小町集』の中から厳密に小町作のみを取り出すことは実証的には極めて困難であって、申請者の小町作に関する判断も概ね妥当といえるにとどまる。しかし、本章に端的に指摘された小町的「あはれ」という質は、そこから本文批判の可能性も展望させるものである。

第三章は、上記の如き多様な伝承の中で人物としての小町研究がされがちであるのに対して、家集の小町作と認められる歌のみから小町の間像に迫ろうとする試みであって、その点にまず意義が認められる。歌々の差を人生の層に重ね合わせるという試みは、大きな危険を孕むものでもあるが、第二章の独自の分析理解の上に立った申請者独自の、一つの小町論として十分に有意義なものと認められる。本文の精読の上に、歌の心に迫ろうとし、その心々を更に「生」の中に位置づけることを試みた、独自の意欲的な労作である。

少女の頃タイで知った一首の小町歌から受けた感動—ことばの重なりが波のように広がって意味をなす律動へのそれは、今ここに論理性をもった説明が与えられている。

よって本論文は博士（人間・環境学）の学位論文として価値あるものと認める。また、平成11年1月28日、論文内容とそれに関連した事項について試問を行った結果、合格と認めた。